

ヴァージニア・ウルフ，資本からギニーへ（1）

太 田 晋

1. 資本

「ひとが資本主義を廃棄することになるのなら、それは心理的には必然かもしれない」。1918年、ヴァージニア・ウルフは1月6日の日記にそう書き留めている¹⁾。文脈を急いで確認しておこう。この日ヴァージニアは、配偶者のレナード・ウルフや友人らと、「社会的な義務、およびトルストイ」をめぐる長い議論を行っていた。良くも悪くも、当時「全盛期」の終わりを迎えつつあったブルームズベリー派らしい話題ではあるが、むしろこの話題の背景には、前年の（というより2ヶ月前の）ロシア革命があるのだろう。いずれにせよ、ここに引用したのは、自身によって記録された、この議論におけるヴァージニアの発言である。

この議論において、ヴァージニアは資本主義への、もしくは資本を所有することへの強い「心理的」抵抗を語っている。「私は、資本の所有という心理的な障害物によって妨害されている人間のひとりなのだ」。理想的な国家では全ての者に年に300ポンドが与えられるだろう」という、フェビアン的な社会民主主義に基づいたレナードの発言も、彼女の抵抗を和らげはしない。「L. は私たちに、なぜ自分の持っているものを保持すべきなのか、そして無償で善行をなすべきなのかという理由を、本当にたくさん語ってくれた。しかし私はなお、自分の激情はひとりの人間が担うには大きすぎるものだと感じている」。

ミシェル・パレットは、ここで表明された抵抗に関連して、かつてヴァージニアが親族の遺産を相続した際のエピソードに注目している²⁾。1909年、彼女の叔母はヴァージニアに2,500ポンドの資産を遺し、彼女にその利息が一定の年収として渡すようにした。しかしこの遺産配分はかなり不均衡なもので、たとえば彼女の兄弟は、ヴァージニアよりもはるかに少額

の資産をしか相続できなかった。そして　　いふなれば「狡猾な」死者による　　この分配の恣意性の経験こそが（ヴァージニアは当時、遺産を兄弟間でより平等に再配分しようと試みたが、失敗に終わった）、パレットによれば、資本の所有そのものに対する抵抗として普遍化されたということになる。この遺産相続に関しては、のち『自分ひとりの部屋』において、ウルフ自身があらためて語り直すことになるトピックでもある以上、彼女を深く当惑させたこの経験の長年にわたる「心理的」影響力は、疑うべくもないだろう。さらにこの抵抗は、とりわけ『自分ひとりの部屋』を経て『3ギニー』に至るウルフの「言説的」テキストにおいて、その主張の多くの部分を規定しているように思われる。そして遺贈された資本とその処置をめぐるウルフの思考は、ことによると、グローバル化した資本主義のただなかでオルタナティブを思考するほかない者たちにとって、世紀を越えて何らかの示唆を与えてくれるかもしれない。この論考は、ひとまずその輪郭を素描することを目指すものである。だが、ここではまず、ウルフの資本への抵抗に深く関わるもうひとつの伝記的事実から始めたい。すなわち、ウルフ夫妻の協同組合運動へのコミットである。

「小売協同組合において消費者を組織し、小売協同組合を通じて小売を、卸売協同組合を通じて卸売と製造業者を、協同銀行を通じて金融を管理することに基づいた、マニュファクチュアと小売と銀行業から成る特異かつ巨大なシステム³⁾。レナード・ウルフがこのように要約する「協同組合運動 (the Co-operative Movement)」と、ウルフ夫妻との関わりは、かなり深いものだった。ロバート・オーウエンの実験は19世紀半ばに失敗に終わったものの、オーウエンの流れを汲んだ協同組合は、イギリスにおいては世紀を越えて存続することになった。しかし同時に協同組合においては、「オーウエンの遺産」として女性の平等な参画がある程度実現されてはいたものの、実践的には女性メンバーの役割は、購買に限定されることが多かった。そうした流れに抗する形で、1883年に設立された団体が「女性協同組合 (the Women's Co-operative Guild, WCG)」である⁴⁾。その書記長を

務めたマーガレット・ルウェリン・デイヴィスは、ウルフ夫妻と親交があり、1913年の WCG 年次会議に夫妻を招待する。以後、両者の関係は長期にわたって続くことになるだろう。レナードは数多くのパンフレットの執筆と出版を通じて協同組合運動のプロパガンダに努め、ヴァージニアもまた自宅を組合の「リッチモンド支部」として、1916年から4年にわたってそこでの月例会議を企画運営することになる。端的に言って、レナードとヴァージニアはこの運動に大きく刺激されたのだ。しかし両者がこの運動から得たものは、互いに大きく異なっていたように思われる。

まずレナードの経験を軸に、この運動の沿革を辿っておこう。植民地行政官として赴任したセイロンでの経験から、帝国主義の批判者となったレナード・ウルフは、協同組合運動の研究によって「社会主義者への転向を完了した」と述べている。そのうえで、彼は協同組合に関して以下のように記す。

大規模産業と独占企業と人口過剰のこの現代世界においては、何らかの形態において、かつ何らかの方法によって、共同体が経済システム全体をかなりの程度まで管理しない限り、文明化された社会が得られるとは思わない。もしそのような管理が国家によって行なわれるなら、そこにはかなりの不利益と危険があるし、労働者あるいは生産者の組織する共同体によって行なわれるなら、なおのこと不利益と危険がある。オーウェンは協同組合運動において、もし拡大と展開がなされれば、経済の大部分を消費者の組織する共同体の管理下におくこととなるようなシステムを考案したように、私には思われる。この形態の社会主義の利点は、利潤と階級対立を除去し、経済システムをある程度まで民主的に管理することを可能にする点にある⁵⁾。

レナードは明らかに、「消費者の組織する共同体」すなわち消費協同組合にこの運動の可能性を見だしていた。生産者に対する消費者が女性（労

働者の妻)としてジェンダー化されていた背景を考えれば、彼が女性協同組合を重視した理由の一端は、おそらくこの点にあるだろう。多くの場合自らも稼ぎ手であったにもかかわらず、男性中心的な労働組合運動から排除されてきた女性たちを、むしろ「消費者」として組織し、この立場からの政治的主体化を導くこと。レナードはこのような観点から、WCGの各地の支部に組織された女性たちへの「課税や国際問題や植民地帝国」に関する講演や教育を通じて、彼女たちの「政治化」を試みることになる。そこで興味深いのは、レナードがこの政治化の経験を、自らの植民地における経験と重ね合わせている点だ。

表面的には、ランカシャーの織物職人の妻やダラムの坑夫の妻と、シンハラの人々との間に、精神や身体や経験や環境の類似はないように見える。だが、カンディの高原やハンバントタの水田や密林で、見慣れぬ異人の男女と話をして過ごした年月は、バートン夫人やハリス夫人を理解し、その気持ちに触れるうえで、助けになってくれたように思う。貧困で素朴な人々が、富裕で洗練された人々よりも「リアル」だというのは真実でないし、コンゴや炭田の方が、ケンブリッジやキャヴェンディッシュ広場よりも「リアリティ」があるというのは本当でない。しかし、身体的な防御もなく精神的にもほとんど無防備なまま、自然ないしは経済システムのカタストロフィに直面し、どうしようもなくそのままになっている人々は、水晶のような純真さと率直な醒めた眼差しをその眼に湛えていて、私はそこに、人間的にも美的にも魅了されたのだ⁶⁾。

審美化という無視しえぬ代償を払ってではあれ、レナードがイギリス本国の女性と植民地の人々とを、互いに通底するものとして見いだしていることに、ひとまず注目しておこう。あるいは、彼はイギリスという宗主国の内部に植民地の状況を見いだした、ともいえるだろう。その思考が「ポストコロニアル」な連帯に向かうことこそなかったものの、レナードをイ

インターナショナルな連合という理想へと向かわせたのは、ある意味でこうした感性だったのかもしれない。協同組合に関する彼の記事は、フェビアン協会のウェブ夫妻に注目され、その流れでレナードは国際政治ジャーナリストとしての本格的な活動を開始する。彼はその延長で、協同による管理という運動の原理を、国際政治の次元に応用することを構想し、1916年に「国際政府」と題された論文を発表する。よく知られているようにこの論文は、ウェブ夫妻を通じて、パリ講和会議においてヴェルサイユ条約のイギリス政府案のベースとして採用され、さらにその内容は国際連盟規約に盛り込まれることになるだろう。その限りで、協同組合運動とレナードとの出会いは、ひとまず大文字の政治のレベルにおいて、国際連盟として結実したといえる。

しかしこの成果もまた、無償ではありえなかった。自伝で当時を回想するレナードは、この論文をきっかけに自分は「『実践政治』と婉曲的に呼ばれるもの」に関わるようになったと述べているが、この婉曲語法は、ひとつには、労働党の近傍で政党政治に関わることを意味している。そしてレナードと密に連絡を取っていた WCG もまた、同様の道を辿ることになるだろう。

そもそも WCG は、協同組合に基盤を置いていたがゆえに、男女同権を目指す中流階級のリベラルな組織とも、第2インターナショナルと結びついた労働者階級の組織とも異なる、労働者の妻すなわち労働者にして消費者の組織として、「第3の道」を提示することができていた。前者に対しては資本主義への明白な対抗を提示する一方で、後者に対しては(後者においてしばしば無視される)「女性の特殊要求」を掲げていた WCG は、女性参政権は言うまでもなく、離婚法の改正や中絶の合法化、そして既婚女性の経済的自立といった先駆的な課題にも取り組んでいた。その意味で WCG は、第1次大戦期に至るまで、労働党を始めとする既存党派とは決定的な距離を置いていたのだった。

しかし1917年の協同組合党(実質的に労働党と同一基盤をもつ)の成立を契機として、WCG は次第に労働党の政党政治に従属し、20年代を通し

てその影響力を失っていくことになる。その組織的規模は拡大したものの、政党による代表制のマトリックスに組み入れられることによって、WCGの諸要求は「労働者階級家庭の福祉への、より広範な、より骨抜きにされた関心へと瓦解していった」⁷⁾。言い換えれば、それは労働者階級家庭の「代表」に組み込まれることで、そもそも自らが問題化していた、家庭に関わるジェンダー的非対称（「女性の特殊要求」）を、不問に付すことになったのである。家庭における無償労働と市場における消費という、女性に対するいつもながらの区画整理を、労働党とともに支持することを、WCGは余儀無くされることになる。協同組合において、その役割が購買（消費）に限定されていた女性を「政治化」というWCGの試みは、かくして30年代以後に再浮上することはなかった。しかし、ならば「女性の特殊要求」を代表する政党が実現されればよかったのか。あるいは、代表制議会を通すことなくして、彼女たちはいかにして語りうるのか。いずれにせよ、ヴァージニア・ウルフがWCGの呼びかけにあらためて応答するのは、この地点においてである。

1931年、ヴァージニア・ウルフはデイヴィスの依頼によって、WCGの組合員の手記を編纂した本への序文を執筆する。デイヴィスへの書簡という形式をとったこの序文は、ウルフが協同組合運動に関わる契機となった、1913年のWCG年次会議の回想が、その多くの部分を占めている。20年代を通してWCGがひとつの歴史を確定した時点で、あらためてWCGとの始まりの遭遇へと、ウルフは逆行する。彼女がそこに見いだしたのは、しかし、心の中に「不快な重みがのしかかり、それが落ち着きなく左右に揺れている」ような、不安を誘う光景だった。この回想でまず関心をひくのは、レナード的な審美化および共感と鋭い対照をなす、どこか不安な冷淡さを伴った隔たりの認識である。

ところで、あの会議はいったい何についてのものだったのでしょうか。

.....あの場にいた女性たちは、離婚を、教育を、投票権を よいこ

とばかりを要求していました。……[しかし]ここにいる人々にとってかくも重要なこれらの問題、つまり衛生や教育や賃金の問題、あと一シリング欲しい、学校にあと一年いたい、売り場や工場での九時間労働を八時間にしたいというような要求が、私の体内に迫ってくることはありませんでした。彼女たちの要求している改革のすべてが、まさにこの瞬間に認められたとしても、私の心地よい資産家の頭の髪の毛一本も、それは動かすことがないでしょう。……私は慈悲深い見物人です。どうしようもなく役者たちから切り離されているのです⁸⁾。

ウルフの「こことよそ」の認識は徹底している。「女性」としてであれ、「消費者」としてであれ、ウルフには自らが彼女たちの代理として語ることができるとは、少しも考えられない。私たち<と>彼女たちは遠く離れているのであって、想像的な同一化は、さらには共感を通じた代行は、この距離を隠蔽こそすれ、いささかも解消することはない。そして、代行を不可能にするこの距離を、ウルフはひとまず肉体的なものとして位置付けている。

弁士を見ながら自分に言い聞かせてみます、「私はダラム市のジャイルズ夫人だというふりをしてみよう」と。そのような名前の女性が、ちょうど私たちに向かって演説をしていました。「私は坑夫の妻です。……いったい全体なぜ、私のところにはお湯や電気を引いてもらえないのでしょうか。その一方で中産階級の女性たちは……」。そこで私は勢いよく立ち上がって、熱をこめて「労力節約の設備と住宅改善」を要求するというわけです。私はダラムのジャイルズ夫人という人になって、次はベイカップのフィリップス夫人になって、その次はウォルヴァートンのエドワーズ夫人になって、勢いよく立ち上がる。しかし結局のところ想像力は、おおむね肉体の子供にすぎません。洗濯用のたらいの中に一度も身をおいたことがないのであれば、ダラムのジャイルズ夫人になることはできないでしょう⁹⁾。

「中産階級の女性」と「坑夫の妻」との距離は、「想像力」によって還元することができない。問題なのは肉体であり、「洗濯用のたらいの中に身をおく」という肉体的経験の有無であるからだ。想像力は「肉体の子供」であるにもかかわらず、この肉体による距離を隠蔽しようとする。したがって、この距離を埋めるかに見える想像的な共感やロマンティックな審美化は、潔く退けられなければならない。「私たちの共感は偽りのものであって、本物ではありません。」「それは審美的な共感であり、眼と想像による共感であって、心と神経による共感ではないのです」。

しかし、ならば「肉体」は、「心と神経」は、何が構築するのか。先に引用した「私の心地よい資産家の頭 (my comfortable capitalist head)」という表現が示すように、「資本」が構築するのだ。そしてつまるところ、肉体的経験の有無を組織しつつ偽りの共感を生み、代行を不可能にする「ことよそ」の距離を、ウルフは「資本」を軸として再定義するだろう。

彼女たちはお風呂と金銭を欲しがっています。さしたるものではないにせよ、短期しかもたない資本が尽きれば自由に飛び立つ精神をもった私たちに、獲得と欲望のあの狭い区域に自分自身を縛り付けるよう期待するのは、不可能というものです。私たちにはお風呂も金銭もあるのです。ですから、どれほど私たちが共感しようと、私たちの共感はおおむね偽りのものです。……そしてこのような共感、つねに肉体的に不快なものです¹⁰⁾。

「自由に飛び立つ精神」と「獲得と欲望のあの狭い区域」との間には「資本」がある。言い換えれば、それは所有する者に「自由に飛び立つ精神」をもたらす一方で、所有しない者に「洗濯用のたらいの中に身をおく」肉体的経験をもちたす。「私たち」と「彼女たち」はその有無によって分割され、精神と肉体における、通約不能な別個の経験がそれに続く。このことがウルフを「不快」にする。1909年のウルフを当惑させた、恣意的に配分された遺産の贈与を、ここで再度想起しよう。ウルフにとって、偶有的

に手にしたはずの資産は、こうして事後的に顧みられたとき、取り消しのできない絶対的な差異を構成するものとして立ち現れる。垂直に打ち込まれたこの差異は、「私たち」と「彼女たち」との水平な連帯を不可能にしてしまうのだ。かくして「資本の所有という心理的な障害物」は、今や彼女を「肉体的に不快」にするだろう。

あるいはこの序文における、自分たちが「中産階級の限界内に閉じ込められている」一方で「彼女たちも同じくらい恵まれないまま」であるという表現を、『自分ひとりの部屋』における、大学の男子学寮から女性が「閉め出されるのはなんと不快なことか、そして閉じ込められるのは多分もっと不快だろう」という表現に重ねることもできるだろう。ウルフを不快にするのは、たんに自らが「閉じ込められている」ことではなく、閉じた内部とそこから排除されたものとをともに構成する、境界設定そのものなのだ。いずれにせよ、レナードが協同の原理を国際連盟にまで発展させる一方で、ヴァージニアが WCG との関わりから得たものは、ひとつには、こうして身体的なレベルですら感じられる心理的苦痛だったといえるかもしれない(ちなみに彼女が WCG 年次会議に招待された1913年は、その精神病の断続的な発作が始まった年でもある)。しかし、苦痛とともに紡がれたウルフの思考が、いくつもの問題を提起していることもまた確実であるように思われる。

たとえばウルフの序文は、WCG 組合員たちの手記を纏めた本に付されたものだが、マンチェスターでの WCG 年次大会で「自分の考えを語り、自分の選挙区の人々の考えを語り、おそらくデヴォンシャーかサセックス、あるいはヨークシャーのどこか煤けた炭坑の村から彼女を送り込んだ女性たちの考えを語り、そうした女性たちの考えを彼女たちに代わってニューカッスル〔実際はマンチェスター〕で語る」女性たちの様子が、「何かしら軍隊風」とネガティブに語られる一方で¹¹⁾、組合員たちが自らの人生を書き記した手記に対しては、ウルフはむしろ審美的な観点からは留保をおきつつも、一定の評価を与えている。「それが文学であるか否かを言うことは控えますが、それが多くを説明し、多くを明らかにしてくれることは

確実です」¹²⁾。つまりウルフは、明らかに代理表象よりも自己表象を重視している（手記を読むことで彼女たちは「象徴であることを止め、かわりに個人になる」とウルフはいう）。こうした態度から、まずはウルフにおける「政治的代行の放棄」（バレット）ないしは政治的な代表システムへの拒否を読み取ることは、可能だろう。ならばそのうえで、ウルフに置ける自己表象もしくは「女性が自ら書くこと」の重視から、「文学的」なそれとは区別される、ある種の政治経済的含意を読み取ることはできないだろうか。

あるいは、ウルフは「資本の所有という心理的な障害物」を語る一方で、まさに「女性が自ら書くこと」の前提条件として、経済的自立を重視していることもまた、たとえば『自分ひとりの部屋』を見る限り明白である。実際、先の引用でも資本の所有は、それが尽きれば「自由に飛び立つ精神」をもたらすとされている。では、そこでいう「自由に飛び立つ精神」とはいかなるものなのか。そして「資本の所有」と「経済的自立」とは、どう違うのか。それを確認するためには、我々は続いて『自分ひとりの部屋』を検討しておくが必要になるだろう。

註

- 1) *The Diary of Virginia Woolf: vol. 1, 1915-1919*, Anne Olivier Bell, ed., (San Diego and New York: Harcourt Brace, 1977), p. 101.
- 2) Michele Barret, "Virginia Woolf: Subjectivity and Politics," *Imagination in Theory: Essays on Writing and Culture* (Cambridge: Polity, 1999), p. 45.
- 3) Leonard Woolf, *Beginning Again: An Autobiography of the Years 1911-1918* (London: The Hogarth Press, 1964), p. 101.
- 4) WCG に関しては、たとえば以下を参照。Gillian Scott, *Feminism and the Politics of Working Women: The Women's Co-operative Guild, 1880s to the Second World War* (London: University College London Press, 1998). Pamela M. Graves, *Labour Women: Women in British Working-Class Politics* (Cambridge: Cambridge University Press, 1994). Karen Offen, *European Feminisms 1700-1950* (Stanford: Stanford University Press, 2000).
- 5) Leonard Woolf, op. cit., pp. 105-106.
- 6) *Ibid.*, p. 108.

- 7) Scott, op. cit., p. 267.
- 8) Virginia Woolf, "Introductory Letter to Margaret Llwyn Davies," Margaret Llwyn Davies, ed., *Life As We Have Known It* (London: Virago, 1977), pp. xx-xxi. [「婦人協同組合の思い出」, 田崎由布子訳, 『女性にとっての職業』(みすず書房, 一九九四年), 三七 - 八頁。]
- 9) Ibid., pp. xxii-xxiii .[邦訳, 三九 - 四〇頁。]
- 10) Ibid., p. xxx, p. xxviii .[邦訳, 四七頁, 四五頁。]
- 11) Ibid., pp. xviii-xix .[邦訳, 三六頁。]
- 12) Ibid., p. xxxxi .[邦訳, 五八頁。ただし参照した版の違いによって邦訳には該当箇所がない。]